「脱穀場の救い主」

マタイによる福音書 3:1-12
マラキ書　３：１-２

２０２４年1月２８日
野村　友美 師

＜理想のリーダー＞

　先週、ナザレン教団の社会委員会の会報が出来上がりました。
その中に「平和の祈り」と題した祈りが掲載されています。戦争の犠牲にされた方々を思い、終戦と本当の意味での平和を願う祈りです。
とにかく一刻も早く、すべての戦争が終わってほしいと願わずにはいられません。
話し合いで解決できることばかりじゃないし、立場や価値観が違うとなかなか折り合いがつかない、というのも事実でしょう。
ウクライナでもロシアでも、パレスチナでもイスラエルでも、それぞれの国の中で、いろんな意見があるだろうと思います。
ですが最終的にどうするかを決めるのは、それぞれの国のリーダーです。それは、私たちが生きているこの日本でも同じでしょう。
よその国で起きていることだって、決して他人事じゃありません。リーダーがどんな人物か、その人が何を言うか、どんな行動をするかによって国同士の関係も、社会のあり方も、私たちの生活も大きく変わります。
だから、せめて自分たちのリーダーにはこうあってほしい、という理想像を人それぞれに持っているんじゃないでしょうか。
イエス様の時代のイスラエルの人たちも、まさにそうでした。長い歴史の中で、ユダヤ民族は他の国々に支配され続けてきました。
イエス様の時代には、ローマ帝国がイスラエルの支配者でした。武力で押さえつけられて、理不尽に服従させられて、尊厳を奪われている。
そんな状況から自分たちを救い出してくれるリーダーを、人々は長い間待ち望んでいたんです。
もちろん、イスラエルの中にもいろんな思惑がありました。王族や政治家たち、裕福な人々は、ローマ帝国の権威を上手に利用して自分たちの地位と財産を守ろうとしていたようです。
イエス様が生まれた時に、イスラエルの王様だったヘロデもそうでした。王族の生まれじゃなくて、元は軍人だったヘロデは、ローマ帝国に取り入ってイスラエルを治める王様にしてもらった人です。彼は自分の王座を守るためなら、幼い子どもたちさえ虐殺しました。
ヘロデの死後、イスラエルを分け合って治めていた、彼の息子たちも同じです。
自分たちの権力を守ることや、欲望を満たすことにばかり目を向けて、ローマ帝国のご機嫌を気にしながら、立場の弱い同胞たちを踏みにじる。そんな支配者たちに絶望した多くの人が、神様からの救い主、メシアの登場を期待していました。
ローマの軍隊にも負けない、圧倒的な力をふるう強いリーダー。神様の正義と公平さで、自分たちを治めてくれる新しい王様。
こういうメシアが来てほしい、こんな人がメシアであってほしい、という理想像を、きっと人それぞれ持っていただろうと思います。
そんな人々の前に突然現れて、「神の国は近づいた、悔い改めて洗礼を受けなさい」と強い言葉で呼びかけたヨハネは、どうやらみんなの理想の

メシア像にピッタリはまったようです。
天使のお告げを受けて生まれた、エルサレム神殿の祭司の息子。厳しい環境の荒れ野で、浮世離れした生活を送っている預言者。
洗礼者ヨハネの出身もライフスタイルも、確かに特別な存在らしいと言えるでしょう。
しかもヨハネは、相手がどんな人でも態度を変えませんでした。政治に携わっていて身分が高いサドカイ派の人にも、律法の専門家として尊敬されているファリサイ派の人にも、まったく容赦も忖度もしません。
形だけの悔い改めも、血筋も身分も知識も、あなたたちを救ってくれはしない。
ただ自分の罪に向き合って、弱い自分を認めて、神様の愛と正しさを求める新しい生き方の実を結びなさい。そう言い放つヨハネの言葉は、人々の耳にどんなに清々しくて新鮮に響いたことでしょうか。ヨハネほど神の民イスラエルのリーダーにふさわしい人はいない。
きっとこの洗礼者ヨハネこそメシアだと、みんな期待を膨らませたんです。

＜ヨハネが示した救い主＞

　ところがヨハネは「後から、私よりもっとすごいお方がやって来られる」と人々に話し始めます。わたしよりも優れた方が来る、とヨハネが言うのを聞いて、そこにいた人たちは、ちょっとがっかりしたかもしれません。
でも、「じゃあヨハネよりもっと理想的なメシアが来るのか」ってますます期待して、わくわくもしたんじゃないかとも思います。
だってこんなにメシアっぽいヨハネが、「わたしはその方の履物のひもを解く値打もない」なんて言うんですから。
当時の社会で、履物の紐を解くのは奴隷の仕事でした。後から来るメシア、本当の救い主と比べたら、私はその人の奴隷になれるほどの値打ちもない、とヨハネは言っているんです。
いったいどれだけ立派で素敵な人が来るんだろう、と人々はみんなヨハネの言葉に胸をときめかせたでしょう。
ですがヨハネの話はここから、みんなの期待とはちょっと違う方向に進みます。これからやって来る救い主はどんな人か、じゃなくて。
その救い主がこれから彼らに何をするのか、ということをヨハネは人々に話して聞かせました。
私はあなたたちに水で洗礼を授けるが、その方は聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる、とヨハネは宣言しています。
ユダヤ教の洗礼はもともと「汚れを清める」とか「洗い流す」という意味で行われる儀式でした。
汚れたものに触った、病気や出血で汚れた、「汚れている」と見なされる他の民族からイスラエルに加わった。そういう外側からの汚れを水で洗い流して清めるのが、当時の洗礼だったんです。でもヨハネは、外側からの汚れじゃなくて、自分の内側の汚れを自覚して悔い改めの洗礼を受けなさい、と人々に呼びかけました。
神様のやり方を無視して、自分の思いに神様を従わせたがる。そんな自分たちの罪を自覚して、神様のやり方に信頼して、これからやって来る救いを受け取れるように、とヨハネはヨルダン川の水で人々に悔い改めの洗礼を授けていたんです。
でも後から来られる救い主は、水じゃなくて聖霊と火であなたたちに洗礼を授ける、とヨハネは語ります。聖霊と火で洗礼を授けるって、一体どういうことでしょうか。

「聖霊」という元の言葉は、「風」とも「息」とも訳せる言葉です。旧約聖書のいちばん初め、世界の成り立ちを物語る創世記は、神様が人間に御自分の息を吹き入れて命をお与えになった、と描いています。つまり聖霊は、私たち人間に命を与えた神様の息、私たちを生かす力とも言えるでしょう。
そして火は古くから、水よりもっと強力に汚れを清める力がある、と考えられていました。
旧約聖書の申命記には、服や糸や革製品にカビが生えたら、まず水で洗って、それでもダメなら火で焼いて清めなさい、という掟が書かれています。心の奥深くまで浸みついて、どうしても洗い流しきれない頑固な罪を、私たちを生かす神様の力で吹き飛ばして、焼き払ってくださる。
救い主はそういうお方なんだ、とヨハネは紹介しているんです。
そしてこのことを、ヨハネはイスラエルの人々になじみ深い光景でたとえています。救い主は、手に箕(み)を持っている。箕というのは、木でできた大きな熊手のような農具です。
イスラエルの農夫は、この箕で収穫した麦の実をすくって空中に放り投げて麦の粒と籾殻(もみがら)をふるい分けていました。麦の実が放り上げられると、中身の詰まった重たい粒はまっすぐ下に落ちます。そして麦粒にまとわりついていた軽い籾殻は、風に吹き飛ばされてしまいます。農夫は、麦の中身は大切に倉の中にしまって、麦から離れた籾殻を集めてまとめて火で焼き払います。
　そんな農夫のように、救い主は私たちをふるって、命を与える聖霊の風に当てて、まとわりついて離れない罪を吹き飛ばして焼き払われる。そして罪から解放された私たちを、御自分の大事な収穫として扱ってくださる。そういう救い主の姿を、ヨハネは人々に伝えたんです。
ヨハネが伝えたこの救い主の姿は、かつて旧約聖書の預言者マラキを通して神様が語られた約束のとおりでした。

「あなたたちが待望している主は、突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者、見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。だが、彼のくる日に誰が身を支えうるか。彼の現れるとき、誰が耐えうるか。
彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。」
（マラキ３：１ｂ－２）

　あなたたちが待ち望んでいる救い主は、必ずやって来る。でもその救い主がやって来たとき、あなたたちはそのままではいられない、と
マラキはイスラエルの人々に宣告しました。
金や銀を火で精錬する人のように、また洗剤で洗い上げる人のように、救い主はあなたたちの罪の汚れを取り除く。
それはあなたたちが神様に信頼できるようになるためだ、とマラキは説明します。
神様があなたたちに恵みを与えて、正しく導いていてくださることを、あなたたちは信頼していない。だから自分で自分に恵みを与えて、自分の正しさに神様を従わせようとしている。
そう言ってマラキは、イスラエルの人々に呼びかけていました。悔い改めて、あなたたちの神様に信頼しなさい、と。
すべての人を罪から救い出して、神様の愛と恵みの真っただ中で生かすためにやって来られた、約束の救い主。それが人となられた神様の独り子、イエス様なのです。

＜脱穀なさる救い主＞

　あなたたちの罪を吹き飛ばして、焼き払う救い主が来る。そう宣言したヨハネはこの後、ガリラヤ地方の領主だったヘロデ・アンティパスに捕えられて、牢に入れられてしまいました。
ヘロデが兄弟の妻を横取りしたことを、ヨハネが批判したからです。そして結局ヨハネはヘロデの命令で首をはねられて、殺されてしまうことになります。救い主が来られたのに何故？神様どうしてですか？と当時の人たちもヨハネ自身も、思わずにはいられなかったでしょう。
現代の私たちも、「神様がおられるなら何故？」「イエス様、どうしてですか？」と問いかけずにはいられない現実を日々生きています。
聖人君子とは言わないけど、それなりに真面目で善良に生きている人がどうして理不尽な苦しみを味わわなくてはいけないのか。
欲望のままにふるまって、好き勝手に人を傷つけて、反省もしないでいる人を神様はどうして放っておかれるのか。
そう訴えずにはいられない出来事が、私たちの世界には今も溢れています。実が詰まって籾殻も薄い、出来がいい良い麦粒みたいな人だけ残しておいてほしい。籾殻ばっかり分厚い悪い麦粒は、中身ごと焼き払ってしまえばいい。
ふるう前に最初から選り分けておいたらどうですか、と神様に提案したくもなるでしょう。
でもそんな時、神様は預言者マラキの言葉で私たちに問いかけておられます。

「彼のくる日に誰が身を支えうるか。彼の現れるとき、誰が耐えうるか。」

そう、もし最初から神様に選り分けられるとしたら。焼き払われないで残る人は、きっと誰もいません。だからこそ、私たちの救い主は忍耐強く何回でも私たちをふるって聖霊の風に当てて、分厚い籾殻を一生懸命に吹き飛ばしてくださるんです。イエス様の手から逃げて転がっても、脱穀場の隅々まで追いかけて来られます。
小さな麦の一粒一粒、私たち一人一人を、みんな御自分の大事な収穫として生かす日まで、脱穀場の救い主は今も働き続けておられるんです。
新しい命を与える聖霊の風と、罪を焼き尽くす愛の火で、イエス様はすべての人を、神様に信頼して生きる人生へと招いておられます。
教会はこのイエス様をリーダーとして、イエス様と一緒に生きる共同体です。
私たちはみんな小さな麦粒で、まだまだ籾殻も外れそうにないかもしれません。
それでも私たちを呼び集めたリーダーは、聖霊と火で洗礼を授ける方、脱穀場に立って働いておられる救い主です。
イエス様の愛の火は、消えることはありません。
私たちに命を与える聖霊の風は、いつも私たちに向かって吹きつけています。
罪の力から解放されて、神様に信頼する人生を生きるように、と。
聖霊の風を受けて、私たちを導く脱穀場の救い主にふるわれながら、
１日ずつ、１歩ずつでも、籾殻を外されていけますように。
ご一緒にお祈りいたしましょう。